

興味を満足させるために

「幼虫のきょうだい発見！」

墨田区立立花幼稚園（東京都）

場面 1

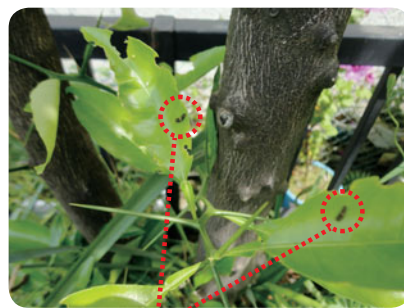
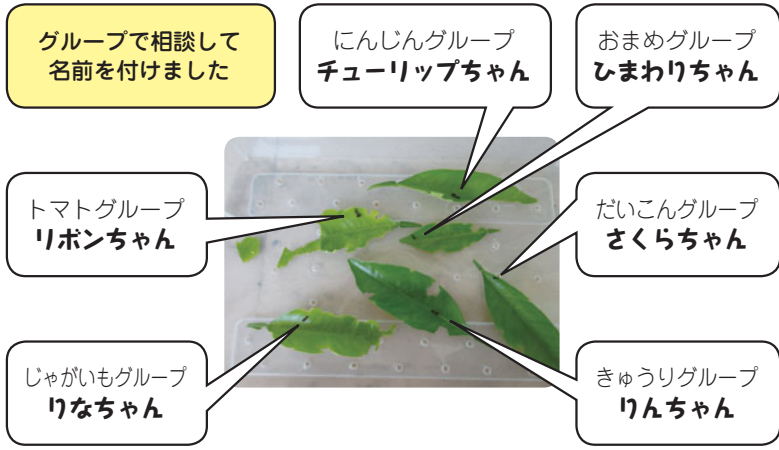
5月《小さな命と出会い、飼育する》

保育者は毎年、子どもたちの自然への興味・関心を高めるため、園のミカンの木から幼虫を探し、アゲハチョウの羽化までの成長を子どもと共に観察している。

今年も5月初め頃から数匹の幼虫を見付け、学級で飼い始めた。餌の葉っぱを子どもと一緒に取っていたある日、子どもの目線の場所に体長2～3mmの幼虫が何匹もいるのを発見する。

「最初はここに住んでたんだね」「みんな同じくらいの大きさだ。きょうだいかな」と興味を示す子どもに、保育者は「今度はグループで1匹ずつ育ててみない？」と投げ掛け、飼育ケースを用意する。

どの幼虫を飼いたいのか、名前はどうかをグループで相談して決める。間近で幼虫を見て「早く大きくならないかな」と興味をもつ子どもが多い中、「気持ち悪い」という反応をする子や、「これ動いてる！」と驚いている子もいる。



ここにいます。体長約3mm



さくら組のようちゅうマンションは、広くて快適ですな〜♪



この事例を活かしてP.16の視点を参考にし、様々なことを想定しながらその後の保育をイメージする。

様々なアイデアを出し、保育の工夫について話し合う。

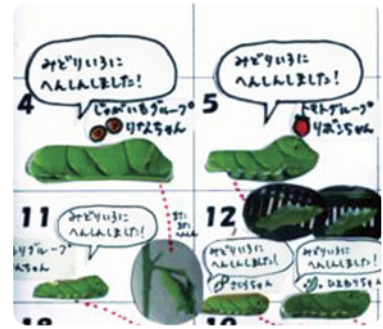
興味を満足させるために

場面 2

《チョウチョになる日はいつ?》 成長への期待が高まる工夫

自分たちが飼い始めたことで「いつ蝶になるのか?」と疑問に思うようになった。学級で飼っていた幼虫(最初にさなぎになったので『いちばんちゃん』と名付けた)が、「最初は黒い体で、次に青虫になったんだよね…」「さなぎになった日から大体10日くらい眠ってチョウチョになるんだよ」と、話題になる。「じゃあ、いちばんちゃんがチョウチョになる日の印をカレンダーにつけておけば」と興味をもって言う。

みんなで数えると、5月31日が羽化の予定日だった。後日、『いちばんちゃん』は本当に10日目の5月31日に羽化。登園し、気付いた子どもが「あ!チョウチョになった」「みんな見て、きれい!!」と大騒ぎになると同時に、「さなぎになったら10回寝るって本当だったね」と多くの子どもが感激していた。(P.22 参照)



《羽の模様ががちがってる》 観察意欲を引き出す工夫

幼虫の飼育の過程を写真で記録しながら、これを図鑑のように見られるようにと、1匹目の『いちばんちゃん』、2匹目の『ピアノちゃん』が羽を広げている写真をクリアファイルに入れることから始め、子どもが手に取れるように置いた。

友達と一緒に写真を見ていたB児は「羽の模様が違ってる」ことに気付く。一緒に見ていたC児、D児が「オスとメスだからじゃない?」と言い、きっとそうだろうということになる。保育者がオスとメスの見分け方を知らないと言うと、クリアファイルを手に園長先生、主事さんらに聞きに行く。「赤い模様がある方がオスなんじゃないかな?」という声が多かったが、はっきりとしたことは分からなかった。



『いちばんちゃん』 『ピアノちゃん』

《チョウチョになるところを見たい!》 感動体験を共有する工夫

当園時刻前に羽化することが続いたので、「僕たちも見たかった」という子どもたちの声に応えるため、保育者は羽化の瞬間をビデオ撮影した。5歳児がこのビデオを鑑賞し、感動した。(P.28 参照)

羽化の場面に感激した幼児は、「お母さんにも見せて。絶対」と言い始め、ついには降園後、親子鑑賞会に。保護者も「わあー」と歓声をあげながら観ており、子どもが毎日どのように蝶のことを話題にしているのかということや、我が子から聞いたエピソードをお互いに語っていた。

後日、4歳児もビデオ鑑賞をし、羽化の瞬間、思わず拍手をして喜んでいた。



ポイント

これまで、学級でアゲハの飼育経験を積んできた子どもたちが、グループで飼育することで、アゲハに対する愛着心や飼育する意欲がこれまで以上に高まりました。工夫された環境により、アゲハをじっくり観察することに繋がり、時間と共に変化することや、1匹1匹の蝶による相違点や共通点に気付いたりしています。また、保護者にも見せたいという思いから、繰り返し誰もが見ることができるときの動画(教育機器)を活かすことを子ども自身が気付いたことで、異年齢児や保護者と羽化の感動を共有することに結びつきました。